Ⅰ　実　践

１　研究主題

差別や偏見に対して正しい認識をもち，行動できる人権教育のあり方

－人権作文への取り組みと生徒作文の学級活動での活用を通して－

（１）主題設定の理由

本校は、「自ら学び，考え，実行する生徒」「思いやりのある心豊かな生徒」「たくましく生きる健康な生徒」を３つの教育目標として掲げている。その中でも「思いやりのある心豊かな生徒」が人権教育と直接かかわりのある目標であり，それを受けて，本校では「生命を尊重する心，他人を思いやる心，正義感や公正さを重んじる心，互いの個性を認め合う心」などをもつ生徒の育成が重要課題であると考えている。

人権教育とは，「人間尊重の精神の涵養を目的とする教育活動」であり「人間尊重の理念に対する理解を深め，これを体得しようとすること」である。そこで本校では，「自己や他者を認め、温かくかかわり合いながら，家庭や地域社会でできることを探し，実行する態度」の育成をめざし，学校の教育活動全体を通して実践を進めてきた。

以上のことから上記本主題及び副題を設定し研究を進めることとした。

（２）研究の内容

ア　研究主題のとらえ方

（ア）「差別や偏見に対して正しい認識」について

私たちは気の毒な人たちがいたとすると同情することはできる。ところが気の毒だと思っていた人や自分よりも弱いと思っていた人たちが権利を主張したりなどすると，とたんに彼らを拒絶し，いじめたり，差別したりすることが多い。今の社会にも人種や年齢，障害の有無や性別，家柄などによる偏見や差別が多く見られる。そうした偏見や差別を解決していくためには相手の人権を尊重する気持ちをもつことが大切であると考える。

（イ）「差別や偏見に対して正しい行動ができる人権教育」について

偏見や差別をなくしていくために私たちがどのように行動していくべきなのか，人権が尊重される社会を実現させていくことが大切である。そのためにはどうすればいいのかをハンセン病患者に向けられていた差別や偏見を知ることで自分たちの中にも潜む同様な気持ちに気付き，人権に配慮した正しい行動について考え，実践していこうという気持ちを高めることができると考えられる。

イ　具体的な研究の進め方

本校のよさである教科教室型を生かした生徒の主体的な学びを展開するには，生徒の自主・自律性を高め，規範意識の高揚を図る必要がある。そのために，心の教育の充実が重要となってくる。

本校では毎年，人権作文に積極的な取り組みを呼びかけている。人権に関して普段あまり意識しきしていない生徒が多いのが実態であるが，まずは学校生活の中で起こりうる問題を取り上げることにより，身近なところにも人権問題があることに気付くことができると考えられる。特に本年度はハンセン病患者の療養所を実際に訪問し，その時の体験や感想を綴った本校生徒の作文を使い，学級活動で扱うことによって人権感覚を磨くことで主題に迫りたいと考える。

２　実践内容

パンフレット「ハンセン病の向こう側」と本校生徒の作文を活用した授業の実践

（１）全国中学生人権作文コンテスト　茨城県大会最優秀賞

国立療養所多摩全生園を訪問して

日立市立駒王中学校　大澤吾侑

ある日，父からバスツアーでの参加を誘われた。東京にある施設を見学するツアーで，なかなか見られないところだというので軽い気持ちで行くことを決めた。

出発近くなり，父が「ハンセン病と人権を考えるツアー」と書かれたパンフレットと，「ぼくのおじさんはハンセン病」というタイトルの本をくれた。この本の著者と父が知り合いで今回のツアーに参加することになったことを聞いた。正直あまり面白そうな感じではなかったが，始めのところだけ読んでみることにした。

ハンセン病は，らい菌の感染によって手足などの末梢神経が麻ひしたり，皮膚に，様々な病的な変化が起こる病気で，早めに適切な治療をしないと感覚がなくなったり，体の一部が変形してしまう病気だ。昔の日本では，らい病と呼ばれて恐ろしい伝染病とされていた。かかった人はみんな病院に閉じ込めて一生そこで過ごすことを法律で決めていた。らい菌に効く薬ができて完全に治るよ

うになった今でも，偏見や差別で苦しんでいる人がいる，ということが書かれていた。東京の施設ってこの収容所のことなんだと知って，僕は少し不安になった。

水戸駅発八時にバスは出発した。参加者は約四十人で，僕と同じくらいの子どもも三人参加していた。バスの中では皆で楽しくおしゃべりをしたり，自己紹介と何を学びたいか抱負を述べたりして過ごした。バスの中は楽しかったが，療養所が近づくにつれて少し不安になった。それは元ハンセン病の人はどんな顔や手をしているのだろうか，うつらない病気とはいっても本当に大丈夫なのかなどと，いろいろ考えてしまった。

多摩全生園につくと，国立ハンセン病資料館の館長さんが出迎えてくれた。館長さんはまぶたがたるみ，手がだらんとしていて一目で元患者だと分かった。驚いている僕に，館長さんはやさしく笑いかけてくれた。なんだか初めから悪いことをしてしまった気がした。あいさつの後，園内のフィールドワークをした。納骨堂はとても大きく立派で，沢山の花が供えてあった。ハンセン病は伝染しないとわかったあとも，家族から拒否されて故郷に帰れなかった人たちが眠っていることを知った。お葬式では，みんな悲しまないそうだ。なぜかというと，亡くなった両親とやっと天国で会えるからだという。生きているうちは決して故郷に帰れないということが，本当にあるのかと悲しくなった。桜の並木を見ながら住宅地の中を歩いた。古い建物から元ハンセン病患者の人たちが，おじぎをしてくれた。僕は，なかなかきちんと顔を見てあいさつができなかった。お寺や神社，教会がたくさんあった。いろいろな宗教の人たちが集まっていることが分かった。古い建物を見ると長く辛い歴史が思い浮かんだ。特に僕は、旧全体学園跡という小学校跡が印象的だった。校庭横にある望郷の丘は，授業が終わると毎日子どもたちが登り，頂上に着くと自分の故郷の方を向いて家族のことを思い出して泣いていたそうだ。

昼食は，さくら公園という広い場所のベンチで食べた。食べている間，沢山の人が通っていた。のんびり散歩をする入所者に交じって，犬の散歩をする近所の方や，自転車に乗った高校生もたくさん見かけた。もうここは昔のように閉鎖された危険な場所ではないんだということが改めて分かった。今まで変な心配をしていた自分が恥ずかしくなった。

午後は，古河市出身のハンセン病の元患者平沢保治さんの講演を資料館二階のホールで聞いた。顔中にいぼができ，手の皮膚は垂れて，指が数本ない姿だった。しかし僕は，はっきりしないけれども一生けん命な話し方に引き込まれた。平沢さんの話で，一番心に残っているのは，「恨みは，恨みで返したくない。みなさんが私の故郷の風を運んできてくれたおかげで故郷に半歩でも近づけたと思う。」という言葉だ。こんな僕に，平沢さんは感謝してくれた。なんて前向きなんだと，とても驚いた。講演後，全員で記念写真を撮った。写真を撮り終わった後，帰りかけたところで，平沢さんから子どもたちだけ来てほしいとお願いがあった。僕は平沢さんの顔のこぶや指のない手を見て，少し委縮してしまった。しかし，平沢さんは緊張する僕たちに大きな手を差し伸べ優しく

「一期一会だね。」

と，話しかけてくれた。握手をするとそのゴツゴツシテいた手は，とても温かった。握手をしながら，今日見てきた景色が思い出されて，この手は，苦しいことや辛いことを乗り越えてきた手なんだと感じた。

帰りのバスの中，今日のパンフレットを開き，平沢さんの手の感触と，一期一会という言葉を絶対忘れないようにしようと思った。

（２）パンフレット「ハンセン病の向こう側」の活用

作文「国立療養所多摩全生園を訪問して」を読み，生徒同士で感想を発表し合った後，ハンセン病のパンフレットを活用して「偏見や差別」について話し合いを行った。Ｐ６の研さんや竪山さんの写真や実体験の話は，生徒たちにとってハンセン病の人々が受けた差別や偏見を深く理解する上で役に立つ資料であった。授業で生徒が記入したワークシートには，「身近な人から受ける差別や偏見がどれほど傷つくものなのかに気付かされた。」「差別や偏見は自分たちの身近なところにもある。自分はよく考えて行動していきたい。」などがあった。

Ⅱ　今後の課題と成果

「自己や他者を認め、温かくかかわり合いながら，家庭や地域社会でできることを探し，実行する態度」の育成をめざし，本校生徒の作文とハンセン病に関するパンフレットを活用できたことで差別や偏見に対して正しい認識をもち，行動しようとする意識を高めることができた。今後は自分の生活している家庭や学校，地域社会での実践が課題になってくる。生徒の活動を支援し，正しい人権感覚を身につけることができるように，日々の学校生活の中でも人権に関する指導を教師が意識して行っていきたい。